

前奏:「いざ喜ベキリストのともがらよ」(M. ヴェックマン)

招詞:眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讃美歌 211「あさかぜしずかにふきて」

交読詩編 145:1-13

(アルファベットによる詩)

- 01【賛美。ダビデの詩。】わたしの王、神よ、あなたをあがめ/世々限りなく御名をたたえます。
- 02 絶えることなくあなたをたたえ/世々限りなく御名を賛美します。
- 03 大いなる主、限りなく賛美される主/大きな御業は究めることもできません。
- 04 人々が、代々に御業をほめたたえ/力強い御業を告げ知らせますように。
- 05 あなたの輝き、栄光と威光/驚くべき御業の数々をわたしは歌います。
- 06 人々が恐るべき御力について語りますように。大きな御業をわたしは数え上げます。
- 07 人々が深い御恵みを語り継いで記念とし/救いの御業を喜び歌いますように。
- 08 主は恵みに富み、憐れみ深く/忍耐強く、慈しみに満ちておられます。
- 09 主はすべてのものに恵みを与え/造られたすべてのものを憐れんでくださいます。
- 10 主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し/あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ
- 11 あなたの主権の栄光を告げ/力強い御業について語りますように。
- 12 その力強い御業と栄光を/主権の輝きを、人の子らに示しますように。
- 13 あなたの主権はとこしえの主権/あなたの統治は代々に。

朗読聖書①イザヤ書 61:1-4

◆貧しい者への福音

- 01 主はわたしに油を注ぎ/主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして/貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み/捕らわれ人には自由を/つながれている人には解放を告知させるために。
- 02 主が恵みをお与えになる年/わたしたちの神が報復される日を告知して/嘆いている人々を慰め
- 03 シオンのゆえに嘆いている人々に/灰に代えて冠をかぶらせ/嘆きに代えて喜びの香油を/暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。彼らは主が輝きを現すために植えられた/正義の樅の木と呼ばれる。
- 04 彼らとはとこしえの廃虚を建て直し/古い荒廃の跡を興す。廃虚の町々、代々の荒廃の跡を新しくする。

朗読聖書②ヨハネによる福音書 21:1-14

◆イエス、七人の弟子に現れる

- 01 その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。
- 02 シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。
- 03 シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行く」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。
- 04 既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。

- 05 イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。
- 06 イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打つと、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。
- 07 イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。
- 08 ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟に戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。
- 09 さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。
- 10 イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。
- 11 シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。
- 12 イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。
- 13 イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。
- 14 イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。

## 祈 禱

復活の主イエス・キリストの父なる御神さま、愛と慈しみに富み給う貴い聖名を賛美致します。この美しい春の朝、夫々の馳場より、一人ひとり名を呼ばれ、復活節第三の主日礼拝へとお招きくださいました恵みを心より感謝申し上げます。また、夫々の事情によりライブ配信によって礼拝に与っている兄弟姉妹に、等しく、恵みをお与えくださいますように、切に祈ります。

私たちは先般、年度始まりの主日礼拝において佃牧師を通し、「主の仕事」と題して力強いメッセージを戴きました。感謝致します。“夫々の場で福音を証しせよ!”と命じられていることを教えられました。私たちは自分自身を主にお献げすることを祈り求めました。

けれども過ぎた一週間の旅路を顧みますと、御心に沿うこと少なく、自己中心的に生き、愛に乏しかったことを告白致します。このような私たちをも今朝、再び御前にお招きくださり、悔い改めの機会を与えてくださった尽きない恵みに感謝申し上げます。

信濃町教会は今年度、恵みの内に100周年の新たなスタートを迎えております。この事業のために心血を注いで準備をされている者たちへ、神さまの特別な顧みを祈り求めます。ここまでの言い尽くせぬ働きに報いてくださり、必要な叡智と愛を注ぎ続けてくださいますように伏してお願い申し上げます。助け合い赦し合って主の御心に適う喜びの時を、教会に属する一人ひとりが感謝を以て分かち合うことが出来ますように、どうぞお導き下さい。

世界の平和のために祈ります。私たちは平和の地に生かされ、礼拝を守ることが許されております。感謝致します。けれど、信仰を与えられているながらも、礼拝を守ることが困難な国や地域の方々に主の助けを切に祈ります。既に二年を過ぎても戦禍の続くウクライナとロシアの人々、リーダーの疲弊した姿に胸が詰まりますが、どれほどの殺戮が繰り返されれば戦いは止むのでしょうか。私たちには解決の道筋すら見えません。また愛する両親を戦禍で亡くしたガザの人は、“命の犠牲が戦争のためではなく平和のた

めであって欲しい”と語りました。全能なる神さまが、この世界に介入してくださることを私たちは強く信じ、祈り続けていくことが出来ますように。

日本においても、一月早々に痛ましい震災がありました。突然悲劇に襲われた北陸の人々の苦しみに助けをお与えくださいますように切に祈ります。また、福島に残された測り知れない負の遺産に赦しと解決の道をお与えくださいますように祈り上げます。願わくは教会の支援の働きを小さくとも皆の総意として続けていくことが出来ますように。

礼拝から遠ざかっている友の上に憐れみ深き主の御導きを祈ります。病で苦しむ友が居ります。痛みと苦しみに耐える信仰の力をお与えください。介護の労苦を担う友、老いの寂しさの中にある友、喪失の苦しみに耐えている友の傍らに、慰めの主がお立ちくださいますように切に祈ります。

今朝『三度目の出現』と題して御言葉を取り次いでくださる鮎川牧師のお働きを祝い、聖霊の豊かなお導きを与えてくださいますように祈ります。御言葉を聴く私たちの心を開き、謙って、今日でなくてはならない恵みを受け取ることが出来ますように切に祈ります。

今朝献げられる日本各地の主の日の礼拝、世界各地の礼拝によって、主の救いが遍く宣べ伝えられますように、聖名が誉め讃えられますように祈ります。

この礼拝の主催者として、初めから終わりまでを御手の内に置いてください。言い尽くしえませぬ感謝と祈り、私たちの尊い救い主イエス・キリストの聖名を通してお祈りいたします。アーメン。

讃美歌:224「われらの神 くすしきまよ」

説教:「三度目の出現」

鮎川健一

復活記念日を迎え、主にある新たな命を受けて新年度を進んでおります。今朝は教団の聖書日課より、ヨハネ福音書から御言葉に聴きますが、ここは付録であって付録でない。14 節に、「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」とあります。主は復活後に二度、弟子たちに現れています。主が復活された日の夕方、エルサレムの家に鍵を締め切って隠れている弟子たちに主が現れた時、彼らは聖霊を受けて福音を宣教するためにこの世に派遣されています。しかしこの記事では、彼らは故郷のティベリアス湖で漁をしている。宣教命令に応えることなく元の姿に戻ってしまったのか。

ヨハネ福音書での着眼点は「見る(ホラオー ὁράω/イドン εἶδον)」ということにあります。主の最後の言葉は、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである(20:29)」とあります。復活の主を見ていたペトロやトマスは“幸いな人たちだ”と思いがちです。しかし主の復活、この復活された主は、戸の鍵を締めていても入って「来て、真ん中に立つ(20:19)」方です。十字架の傷跡を体に残した主から「見ないのに信じる人は幸いである(20:29)」と告げられています。「見ないのに信じる人」とは聴いて信じる者たちのことです。主を信じることは、罪の赦しと新しい命、ここにあります。主は「神の子メシア」として私たちの罪を赦し、新しい命を与え、今も聖霊において生きておられる。その信仰において私たちは新しい「命」を与えられます。ペトロが問われたのも、このこと故です。マグダラのマリアの「わたしは主を見ました(20:18)」という証言があります。マリアもまた、墓の前で天使の証言を聞き、主から二度も語りかけられて、ようやくそのことが分かった。信仰による

愛がなければ、目の前に主がおられ、語りかけられても分からない。それはエマオ途上の弟子たち(ルカ 21:13-16)と同じです。主から語りかけられていたのに分からなかった。しかし福音宣教に遣われる使徒となっていった。彼らに新しい命が与えられた。これは主を見たからではなく、分かったことだからです。御霊の働きから起こされる信仰によってということです。

ではなぜペトロを初めとする弟子たちはティベリアス湖にいて漁をしているのかです。また詳しく「ガリラヤのカナ出身」と書かれるナタナエルは、ヨハネ福音書にしか出てきませんが、カナという町、これは主が最初に水をぶどう酒に変えるしるしを行われた町(2:1)で、山の町です。彼は漁師ではないということ。また「ゼベダイの子たち」、彼らは他の福音書ではヨハネとヤコブで、ガリラヤ湖の漁師です。また7人という完全数がここで記されています。彼らが漁師であったかどうかは当時の教会の人は知っており、そうならばペトロを弟子として召し出す時に主が告げられた言葉、「人間をとる漁師にする(ルカ 5:10 並行)」も必然です。そのペトロの「わたしは漁に行く」という言葉に応えた「わたしたちも一緒に行こう」という他の弟子たちの言葉(ヨハ 21:3)は、ヨハネとヤコブ以外は漁師ではないのにどう受け止めたのか、ということです。通常は“ガリラヤ湖”と言われる湖がここでは敢えて“ティベリアス湖”と言われます。“ティベリアス”、これは主が誕生した時のローマ皇帝アウグストスの後継者の名前です。ヘロデ大王の息子ヘロデ・アグリッパがガリラヤ湖北西岸にローマ式の町を建設した時、ティベリウスへの忠誠を示す意味で“ティベリアス”と名付けました。ユダヤ人にしてみれば屈辱的なことでした。しかしヨハネはガリラヤ湖であるこの湖を、敢えて“ティベリアス”と名付けているわけです。また“ゲネサレの海”と呼ばれていた湖、それをも含めてです。

ヨハネ福音書には、「命(ζωή)」という言葉が6章に集中的に出て来ます。それは、聖餐のパンに関する論争の場面です。今朝の所にもパンが出てきます。6章では、ティベリアス湖の岸辺で五つのパンと二匹の魚を五千人の群衆に分けて満ち足らせたというこの大きな「しるし」を主が行われた所です。魚とパンはここでも重要です。またヨハネ福音書での最後の晩餐は、洗足木曜日によく読まれる箇所、「弟子の足を洗う」という場面があります。この福音書で聖餐の原型は、五千人の給食とその後に続くパンを巡る論争にありました。今朝の所の食事も「杯」はありませんが、聖餐の食卓に通ずるものがあります。6章と密接な関係にもあり、後の教会の礼拝に大きな影響を与えていきました。この6章では、悪天候の湖で主が現れて弟子たちに一言、言われました、「わたしだ。恐れることはない。」元の言葉では「エゴ・エイミ(ἐγώ εἰμι)6:21)ですが、神が御自身の名をモーセに告げた(出 3:14)、その時の言葉(エイエ・アシェル・エイエ אֲשֶׁר אֲשֶׁר אֲשֶׁר)と同じであり、神の臨在を表す言葉です。身動き出来ない弟子たちに、「わたしがまことの王だ。あなたがたと共に生きる者だ」と語りかけて下さる。それはローマ帝国の皇帝ティベリアスが支配している世界の只中で藻掻いている弟子たちに対してなされた言葉です。ヨハネは、そういう主の御姿を信仰の表現から証言しています。

ローマ共和政時代には、人々が国や有権者たちに食料や娯楽を求め、それらを提供してくれる政権や人物を支持したことを、当時の『諷刺詩』として書き残されています。この世の支配者の地位獲得と支持の温存は、何時の時代、どの国も同じようです。しかし“エゴ・エイミ”と言われる方は、人の思いや目先の願望を叶えるためではなく、永遠の命を与えるパンと

して、ご自身の肉を与えて下さる方です。それよって弟子たちの多くも、「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか(6:60)」と捨て台詞を吐いて、十二人だけが残ったというわけです。しかし残ったから“よし”とも言い切れません。現代でも自分の願いが叶わないと教会から足が遠のいたり、二度と来なかったり、また逆にいつかは自分の思いが実現すると思いつている人も“無きにも非ず”ですから、“教会にいれば正しい人”とはなりません。どちらも神よりも自分が一番です。しかしペトロが「わたしは漁に行く(21:3)」と言い、他の弟子たちも「わたしたちも一緒にいこう」と出向いたあのティベリアス湖は、迫害の厳しいローマ帝国であり、“漁とは人間をとる伝道の業の暗示”、このこととなれば、弟子たちは主の派遣命令に背いて元の所に帰ったのではないし、漁師をしながら伝道に励んでいたのでもないということです。ペトロは一人でも漁に出掛ける覚悟を示し、他の弟子たちもペトロと共に覚悟をもって伝道に出かけました。伝道はひとりで進めたり完成したりはできません。どんなに信仰篤く裁量に長けている牧師でも、また若い力や長年の信仰歴を持っている信徒でもできません。教会の信仰に立つ全ての者たちが同じ思いにならなければ、同じ所でぐるぐる回って進みません。あの弟子たちが舟の上で迷っていたのと同じ状態になります。教会は信仰共同体です。まして“キリストにある”ということはキリストの光の中を進みます。弟子たちが湖に向かったのは「夜」の時でした。象徴的な描写です。疲れも達する夜明けの光の中で、弟子たちは岸辺に立っている人を見ました。しかし彼らには「それがイエスだとは分からなかった(21:4)」そこで主は問いかけ命じます。その言葉に彼らは迷うことなく、疲れた体の力を振り絞って網を打ちました。すると、既に主が用意されたその信じ難いほどの魚を獲ったことになります。大漁でした。そのしるしを見た時、「主」であることが分かった。必死になって岸辺に戻ると炭火が起こしてあり、「魚がのせてあり、パンもあった」。そして主は言われます。「今とった魚を何匹か持って来なさい。(21:10)、そこでペトロが数えてみると、「百五十三匹であった(21:11)」と細かく数字が描かれています。

今までこの数について様々な解釈がなされてきましたが、それは世界の様々な人種や民族の象徴となっています。当時の世界はローマ帝国あつての世界で、ローマ皇帝の圧倒的な武力と権力の前にひれ伏す平和、それを“ローマの平和”と言っていますが、これは“ローマにとっての平和”、他の国のことは全く関係ありません。ローマの都合にあつての平和です。そういった中でユダヤの人々は生きていました。しかしそこで、真の漁師である主の宣教命令に従って伝道がなされていった時、世界中のあらゆる人種民族の人達が救いの網の中に入れられている。多種多様な人々が一つの網の中に入っても網は破れない。その救いの現実、また終りの日に起こる世界の完成をこの場面は象徴しています。つまり“来たるべき日”の現実、実現の先取りです。この後でペトロは“主の羊を飼うよう”命じられ(21:15-19)、さらに殉教の死が予告されます(21:23)。教会の伝道は始まったばかり。ペトロを中心とする教会の体制は少しずつ形成されていきますが、次々と殉教者と背教者を出し厳しい伝道の歩みでもあったということです。厳しい伝道の業、その現実を生きる弟子たちに、主は救いの完成の展望を現わされたのでしょう。伝道ヴィジョンのない教会に先はありません。しかも次世代に継がれることなくそこで終わってしまいます。このことは教会に限られたことではありません。どの組織でも同じことが言えます。また町や村でも同じようなことが言えます。このヴィジョンというものをどう持つ

か、何を具体的に示していくか、行っていくか、そこが重要な所だということです。そのことから、弟子たちはガリラヤの漁師たちでした。その弟子たちが、微力ながらも世界宣教へと向かい、各地にキリスト教会が現われてきました。そこで信ずる者が起こされていきました。

ここで魚についておさらいします。以前全体礼拝(20240128)子ども向け説教でのお話で皆さんもお聞きでしょうが、主が岸辺で焼いている魚は、原文では「オブサリオン(ὀψάριον)」という言葉です。これも「魚」と言う意味ですが敢て変えてあります。ところで言われたものは、「イクスース(ἰχθύς)」と言う言葉、シモン・ペトロが数えた魚は「イクスース」という言葉です。そして魚のマークになっていますが、これはローマ帝国の迫害の中で信仰に生きるキリスト者のしるしでした。今でも魚のマークはシymbol的に表現されますけれども、「イクスース」はその文字の一つ一つが、「イエス(Ἰησοῦς)・キリスト(Χριστός)・神の子(Θεός)・救い主(σωτήρ)」の頭文字になっています。ペトロは、そういう魚を数えた。彼がその魚を数え終わった時、主は言われました。「さあ、来て、朝の食事をしなさい。(21:12)。「さあ、来て(δεῦτε)」とは、ヨハネ福音書では、サマリアの女が町の人々に救い主を見て欲しいばかりに、「さあ、見に来て下さい(4:29)」と招く場面にあります。マタイ福音書では、主の墓にきた婦人たちに天使が「さあ、遺体のあった場所を見なさい(マタ 28:6)」と語りかける場面です。どれも救いの御業の現実を指しています。今朝の所では「朝の食事」です。主が備え、提供して下さる食事。ここで彼らは正式に“弟子となった”とも言えます。弟子とは師が誰であり、どういう意味で師であるかが分かった者のことです。また主の弟子とは、主の派遣に応じてこの世において罪の赦しを宣教し、主を証しする者です。信ずる者全ての姿です。何がどこに書いてあるかという説明をするものではありません。一人ひとりの信仰生活を証しする、その主がおられる、そのことを伝える者です。主はその者たちを見て下さり、「網を打ちなさい(ヨハ 21:6)」と促して下さいます。その促しに応える者を通して、主ご自身が救いの御業を為して下さる。そして食事を用意し、提供して下さるということです。それは私たちに照らせば、「礼拝」です。私たちの日曜毎の礼拝は、神の家族の食事の時間です。そこで頂く御言葉は命のパン、また聖餐は、まさに主の食卓そのものです。その食卓に命の息である聖霊を注がれつつ信仰をもって与る時、私たちはここに主が生きておられ、私たちを励まし、造り変え、主に仕える志しを新たにされて、伝道の使命に派遣して下さる、このことを知るのです。

最後に弟子たちの隠れ家に、「イエスが来て真ん中に立った(20:26)」ことを思い起こします。復活の主が新たに彼らの所に来て、真ん中で復活の主としてパンを取り、弟子たちに渡して下さいます。そして今、命のパンを私たちに与えて下さる主がおられることを知る。そこに礼拝が起こり、まことの命なる幸いという現実が生じます。原始キリスト教会は、このローマ帝国の迫害を受ける中で成長していきました。ユダヤ教側からも迫害を受けましたし、また使徒言行録には、各地で土地の宗教関係者や民衆からの迫害を受け、そこで殉教者を出しつつも伝道を止めずに成長し続けたことが記されています。それはいつも宣教のヴィジョンを持ち続け、主に信頼を抱きつつ復活の主を見ることが出来たからです。全ては“向こう岸に渡ろう(ルカ 8:22 並行)”と沖に漕ぎ出したり、「わたしは漁に行く(ヨハ 21:3)」と言って沖に漕ぎ出す弟子において、その行動において起こったことです。主を信じているといつも沖に漕ぎだす行動をせず、隠れ家の中に隠れている者に主

の存在はわかりません。三度目の主の顕現は、そういう意味で二度目までとは全く違う状況の中で起こりました。彼らは聖霊を受けています。恐れや不安、自己保持にある部屋から御言葉と御霊によって、荒れ狂う湖の中へ漕ぎ出し網を打っています。その彼らの所に主は来て下さり食卓を用意して下さい。私たち一人一人の状況は様々でしょうけれども、心底から主を信じ積極的に証し人としての業を担って行動を起こし、そのことを常々実行しているならば、その人の所に「イエスは来られ(20:19)」、「あなたがたに平和があるように(20:19)」と語りかけ、「息を吹きかけ(22 節)」てくださる、そして「網を打ちなさい(21:6)」と告げ、「さあ、来て、朝の食事をしなさい(21:21)」と招いて下さるのです。そして、「パンを与えて下さる(21:13)」主の御姿とその御言葉を聴いて信じ、聖書の告げる、主の告げられる幸いに生きる人、その人は永遠の命に生き、終わりの日に復活させられる、と主は言われます。

主の三度目の出現、その命と幸いを、この 153 匹の魚、あらゆる人種、民族に与えるために、主は今日も来て下さっておられる。その中で主に仕えて生かされ、聖餐の恵みを受けつつ、「主が来られるときに至るまで、主の死を告げ知らせ(1コリ 11:26/聖餐制定語)」てゆく私たちです。主に捉えられた者は、心から神の国の完成を望み、主に応えるべくして宣教の業に励む志を新たに、ここから進み出で行く者でありたいと願います。

**祈りを献げましょう。**

我ら罪人の贖い主となり給う御子主イエス・キリストの父なる御神さま、恵みの時を感謝致します。

しかし、未だこの世は多くの暗闇にあります。真の光にある教会の働きを聖め、義し、宣教の業に力を得させてください。どうか約束された神の御霊によって、あなたに忠実に仕え、証人として誠実に立つことが出来ますように。天上に連なるあなたへの望みを持たせてください。

共々に真の光を信ずる者となりますよう祈り願いつつ、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

**讃美歌:326「地よ、声たかく」**

**献金・感謝(中川信明)・主の祈り**

イエス・キリストの父なる神さま、聖名を賛美致します。

復活第三週のこの主の日に、一人ひとりの名前を呼んで礼拝堂へと集められ、またライブ配信を通して共に礼拝の恵みに与ることが出来ましたことを感謝致します。

今日は鮎川牧師より、ヨハネによる福音書第 21 章の復活の記事を通して弟子たちが復活の主イエスに三度目に出逢い、霊の命を与えられ、また証人として立てられていたことを学びました。そして私たちも今、あなたによって命と希望を与えられ、証人として立てられている恵みを感謝しつつ、これからも主イエスに従って歩んで行くことが出来ますようにお導きをお願い致します。

私たちは日々多くの物を与えられ、それによって養われておりますけれど、そのほんの一部を献身のしるしとしてここに献げます。教会の御用のためにお使ください。

主から与えられました「主の祈り」を共に祈りつつ、週の歩み出しをさせてください。「主の祈り」…アーメン。

**派遣:讃美歌 88「心に愛を」**

**祝福:** 主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたがた一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

**報告:**略

**後奏:**「いざ喜べキリストのともがらよ」(M. ヴェックマン)